

▶ 第64回 法円坂地域医療フォーラム

2025年6月7日(土)、ホテルグランヴィア大阪にて「第64回 法円坂地域医療フォーラム」を開催いたしました。

講演①②では、当院耳鼻咽喉科科長の西村洋医師が座長を務め、大阪大学大学院医学系研究科 耳鼻咽喉科・頭頸部外科学 助教の津田武先生をお招きし、耳鼻咽喉科の立場から「アレルギー性気道炎症に対する最新の治療」をご講演いただきました。また、当院呼吸器内科科長の南誠剛医師が、「気管支喘息治療の現在地」の講演を行いました。

さらに、講演③では、むらのクリニックの村野実之先生を座長にお招きし、当院呼吸器外科科長の高見康二医師が、「肺癌の診断と外科治療」の講演を行いました。

当院では年3回、法円坂地域医療フォーラム運営協議会主催にて、医療関係者向け学術講演会「法円坂地域医療フォーラム」を開催しております。当院におきましては、独立行政法人国立病院機構の基幹病院として、政策医療も含めた高度総合医療を実践すべく、地域の先生方にはより一層の連携をお願いしながら、引き続き努力して参ります。今後とも変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。



▶ 今後の法円坂地域医療フォーラムについて

今後の開催予定		
第65回	2025年 11月15日(土)	糖尿病・内分泌内科 当院 災害医療棟3階会議室にて開催
第66回	2026年2月7日(土)	血液内科・血友病科

お申し込みはこちら



読者
アンケート

ONH NEWS[オーエヌエイチニュース]では、年4回、当院の最新情報をお届けいたします。より充実した広報誌づくりの参考にさせていただきますので、アンケートにご協力をお願いします。



院長

松村 泰志

ピーレジ事務局長

饗庭 信介

血友病科/感染症内科 医長

西田 恭治

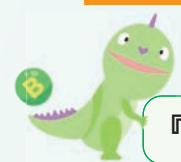
血友病科 科長

武山 雅博

特集 | クロストーク

「ピーレジ(血液凝固異常症レジストリ)」、スタート!
運営チームの熱意とビジョン

特集 | クロストーク



『ビーレジ(血液凝固異常症レジストリ)』、スタート！

運営チームの熱意とビジョン

2025年5月2日より、当院に事務局を置く『血液凝固異常症レジストリ(愛称:ビーレジ)』がスタートしました。ビーレジの目的は、血液凝固異常症の患者さんおよび血友病保因者(血友病の原因となる遺伝子を有する女性)の診断、治療、経過などの情報を記録し、医療の質の向上や、研究・調査に活用することです。今回は、松村院長をはじめ、ビーレジの運営に携わるメンバーの声を紹介します。

これまでになかった 全国規模の医療レジストリ

松村 院長(以下:敬称略)：

このたび、『血液凝固異常症レジストリ(以下:ビーレジ)』がスタートし、システム開発や体制構築に携わってきた者として感無量です。ビーレジにはさまざまなメリットや可能性があるのですが、一般的にはまだ馴染みがないと思いますので、「ビーレジとは?」というところからご紹介できればと思います。

饗庭 ビーレジ事務局長(以下:敬称略)：

ビーレジは、血友病をはじめとする血液凝固異常症の患者さんと血友病保因者を対象に、診断、治療内容、日々の症状や副作用などを時系列に沿って記録・蓄積するデータベースです。こうした医療情報をビーレジに参画している医療機関、製薬企業、研究機関、行政で共有することで、患者さんの一人ひとりの治療や研究・調査などに活用することが主な目的です。登録までの流れは、まず、日本血栓止血学会内にある血友病診療連携委員会が認定した、全国に約100施設あるブロック拠点病院または地域中核病院で受診してもらいます。そして、患者さんの同意のもと、医療従事者が基本情報を入力し、その後はご自身がスマートフォンアプリを使用して、注射や出血の状況を記録していきます。

松村: これまでも様々な疾患の患者さんを対象としたレジストリはありましたが、情報を収集する医療機関に限られ、観察期間も短いものが大半でした。それに対してビーレジは全国規模で長期的に実施される点が大きな特長です。血液凝固異常症は有病率が低く、生涯にわたる観察が必要なので、ビーレジの特性は必須だと考えています。

武山 血友病科科長(以下:敬称略)：

血友病の保因者は、発症している方とはほぼ同数存在すると推定されていますが、多くの方は医療的支援を受けられていないのが現状です。ビーレジに登録していただくことで、万が一の際に、適切な医療を受けられるセーフティネットになります。そのため、当院では血友病の患者さんを診療する際、

ご家族の構成を確認し、該当する方がいらっしゃる場合には登録をお勧めしています。

西田 血友病科／感染症内科医長(以下:敬称略)：

従来のレジストリの大きな課題は、登録されている患者数が少ないことでした。世界規模で展開されている『世界出血性疾患レジストリ』においても、運営している世界血友病連盟から「日本の登録者数は少ない」という指摘を受けていました。しかし、全国規模のビーレジが開設されたことで、登録者数を増やす基盤が整ったといえるでしょう。

現在だけでなく 将来も見据えた仕組みづくり

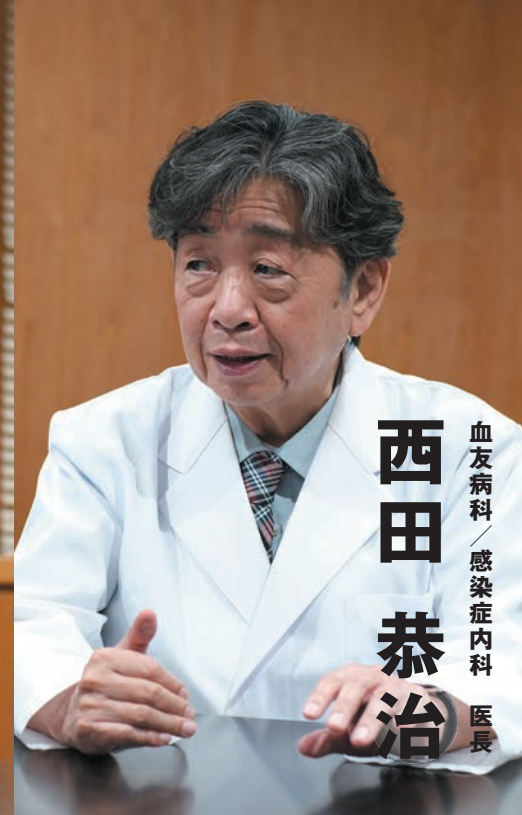
西田: 先ほどの説明にもあったように、患者さんと保因者のデータを収集・共有することで、治療の最適化、新薬の開発、患者さんご家族のネットワーク形成などに活かすことが可能です。また、公費負担制度の維持にも貢献できると考えています。現在、この疾患の治療費は公費負担となっていますが、医療経済が厳しさを増すなか、将来的に自己負担を求められる可能性も否定できません。そのような状況に備えて、信頼性のあるデータを提示することは、制度継続を国に訴えるうえでの重要な根拠となります。

武山: 私がビーレジに期待している効果のひとつは、新薬の市販後調査です。従来の調査は実施期間に限られたものが大半で、長期的な検証は困難でした。しかし、ビーレジを活用することで、長期的かつ詳細なデータを検証できるようになります。これは医師だけでなく、製薬企業や研究機関、さらには患者さんにとっても有益といえるでしょう。

松村: システム開発で重視したのは、患者さんご自身に日々の注射や出血の状況を入力していただくという仕様です。これは、タイムラグなく継続的に記録を蓄積していくための重要なポイントになります。また、患者さんが転居や転院された場合も、ビーレジに参画している医療機関であれば継続できる点も特長です。そして、対象者がお子さんの場合は、保護者の方が代わ



院長
松村 泰志



血友病科／感染症内科 医長
西田 恭治



血友病科 科長
武山 雅博



ビーレジ事務局長
饗庭 信介

りにデータ入力をしていただく必要があるため、複数の利用者から安全にアクセスできるようにしました。年齢を問わず生涯にわたる治療が必要な疾患ですので、この3点は欠かせない要素でした。関係者の方々や患者会の方々から、ご意見やアドバイスをいただいたおかげで良いものができたと感じています。

ポジティブな反応を得て 確かな手応えを実感

松村: さて、2025年5月2日からビーレジがスタートしたわけですが、これまでの手応えはいかがですか。

武山: 現在(2025年5月12日)のところ、当院では18名の患者さんにご登録いただきました。ありがたいことに、ビーレジの説明をすると、みなさんポジティブに捉えてくださっています。

饗庭: 事務局でもリーフレットの配布を開始してから、医療従事者だけでなく、患者さんやご家族からもたくさんのお問い合わせをいただいています。

西田: ひとまず安心しました(笑)。ビーレジを有効活用するためには、まず多くの方に知っていただくことが大切ですので、今後はさらにPR活動に力を入れていく必要がありますね。名前を覚えてもらうという点では、『ビーレジ』という愛称を付けたのは効果的だったと思います。次のフェーズとして、対象となる方々に登録していただくための働きかけが重要であり、いちばん大きな課題になるのではないのでしょうか。例えば、登録を受け付けているブロック拠点病院と地域中核病院は全国に約100施設ありますが、兵庫県を例に挙げると瀬戸内側にしかないため、日本海側にお住まいの方にとっては時間的・経済的な負担が大きくなってしまいます。こうしたハードルをどう下げていくかについては、今後の状況を見ながら検討していく必要があると思います。

武山: そうですね。認知度アップの取り組みに加えて、ビーレジの目的やメ

リットを理解していただけるよう、積極的に広報活動を行っています。先日も製薬企業の協力を得て、医療従事者を対象とした講演会を開催しました。今後もこうした草の根活動を続けることが大切だと考えています。当院では、今年中に当院で受診されている方300名の登録を目指しています。

饗庭: 事務局としても、日々の運営を適切に行いながら、長期的に継続させるために、マンパワーを含めた体制の強化に取り組んでいきたいと考えています。

松村: ビーレジはチャレンジングなところもありますが、うまく機能すれば、患者さんの状況を時系列に沿って把握できるタテ軸と、医療機関を繋ぐ横軸、さらには製薬企業、行政、患者さん同士がつながることで、将来的な可能性が広がっていくのではないかと期待しています。そのために少しでも多くの方に登録していただき、目標を達成できるように注力していきます。

ビーレジ登録までの流れ



🔍 Doctor's View 当院診療科の代表医師が

医師が語る診療科の“現在”



呼吸器内科

呼吸器内科 科長
南 誠剛 Minami Seigo

幅広い診療体制の充実と 医師の専門性向上を図る

呼吸器内科は、院内外のニーズに応えるため、間質性肺炎、肺がん、慢性閉塞性肺疾患（COPD）、気管支喘息、呼吸器感染症など、呼吸器疾患全般に対応しており、医師それぞれが専門性を有していることが特長です。

得意とする肺がんに加えて 肺炎の治療にも注力

呼吸器疾患は高齢者に多いため、高齢化社会が進むにつれて患者さんの数は増えています。また、2024年の秋は寒暖差が大きかった影響で、喘息や慢性閉塞性肺疾患（COPD）を悪化させる方が多くおられました。当科はこうした状況に対応できるように、呼吸器疾患に関する幅広い診療を行っており、そのなかでも間質性肺炎、肺がん、COPDおよび気管支喘息、呼吸器感染症などを多く手掛けています。

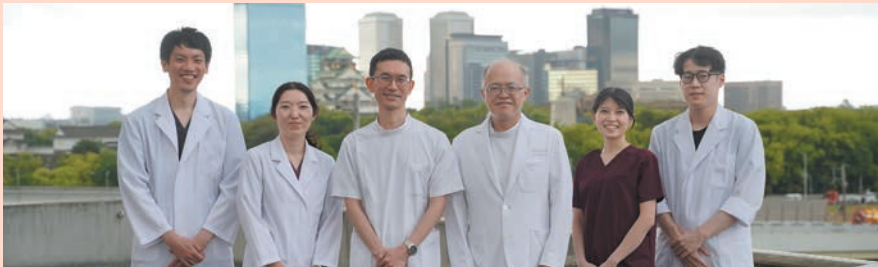
間質性肺炎はウイルス性、薬剤性、過敏性などさまざまな病型があり、正確な診断をするのがむずかしい疾患です。当科では問診、身体診察、X線、CT、スパイロメトリー、運動時の血液中の酸素の量の低下の割合などを検査・評価したうえで、病型や進行度合いに応じた治療を行っています。

肺がん治療は、以前から当科が得意としている領域です。手術は呼吸器外科、そのほかの治療は呼吸器内科が担当することで、スピー

ディーかつ双方の専門性を発揮できる連携体制を構築しています。近年は抗がん剤治療が複雑化しており、がん薬物療法専門医（南科長）が所属していることも強みといえるでしょう。

注目のCOPD、喘息、そして ACOに対して精度の高い 検査・治療を実施

COPDは潜在的な患者さんを含めると500万人以上といわれています。そして、2018年に呼吸器学会による手引きで、COPDと喘息の症状を併せもつACOという概念が示されました。名称の通りそれぞれの症状が重なる部分がありながらも、COPDと喘息では治療法が異なるため、ス

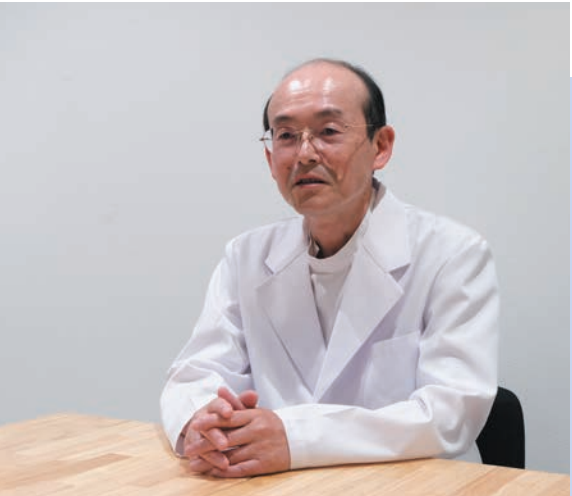


パイロメトリーに加えて呼気NO検査を行い、患者さんの状態に適した治療を行っています。こうした診療体制を有している医療機関は限られており、当院ではじめて診療を受けてACOであることが明らかになる患者さんも少なくありません。

また、気胸・膿胸については、呼吸器外科と呼吸器内科が初期段階から回診やカンファレンスを合同で行うことで、迅速・適切な治療に繋がっています。

今後はオールラウンドな診療体制を充実させると共に、所属する医師それぞれの専門性を高め、ナレッジ共有を強化することで、科内全体のレベルアップを図っていきたいと考えています。そして、地域の先生方との連携促進に向けて、敷居の低い外来受け入れに努めてまいります。

治療・手術などの取り組みや実績についてお話しします。



皮膚科

皮膚科 科長
小澤 健太郎 Kentaro Ozawa

重症の患者さんを担うことで 地域医療連携を推進

患者さんの高齢化に伴い皮膚疾患が増加するなか、皮膚科では皮膚疾患全般に対応しています。特に皮膚腫瘍および皮膚感染症の治療に力を入れており、高精度な検査をもとに、患者さん一人ひとりの病状に応じた治療を行っています。

悪性腫瘍に対して効果的な 集学的治療を展開

当科は、皮膚腫瘍をはじめ、皮膚感染症、自己免疫性疾患、アレルギー性疾患など、皮膚疾患に対する幅広い診療を行っています。そのなかでも特に、皮膚腫瘍と皮膚感染症の治療に力を入れている点が特徴です。また、地域医療連携の推進に向けて、重症の患者さん、あるいは複雑な症状の患者さんを対象にした入院診療を重視しています。

皮膚腫瘍は、高齢化社会を背景に増加している疾患のひとつです。大半は良性腫瘍ですが、なかには短期間で大きくなって周囲の組織を破壊したり、他の臓器に転移する悪性腫瘍のケースもあるため、正確な診断が重要となります。当科では、ダーモスコピー検査の他、必要に応じて皮膚生検を実施。皮下の腫瘍に対しては超音波検査やCT、MRIなどの画像検査を行ったうえで診断し、適切な治療を行っています。そして、悪性腫瘍に関しては手術に加えて、化学療法、放射線治療などを

効果的に組み合わせた集学的治療を実施しています。近年は抗がん剤の進歩が目覚ましく、新しい薬剤が開発されており、当科においても積極的に導入しています。

患者さんの病状に応じた 適切な感染症治療を実施

蜂窩織炎、带状疱疹、壊死性筋膜炎などの皮膚感染症も高齢化社会の影響で増えています。皮膚感染症には、ウイルス、細菌、抗酸菌、真菌など、さまざまな病原体があるため、適切な検査と正確な診断が重要です。当科では皮膚生検や抗原検査などを実施し、患者さんの病状に合わせて薬物療法や手術など、適切な治療を行っています。

その他に注力している取り組みとして、人材育成が挙げられます。当科は日本皮膚科学会認定専門医研修施設であるため、若手の皮膚科医師の教育を積極的に行っています。また、皮膚科は女性医師が多いことから、女性医師の復職支援を推進しており、結婚・出産

などのライフイベントで現場を離れた方々がスムーズに復帰して、無理なく働きつづけられるようにサポートしています。

開業医の先生方との連携強化も不可欠な取り組みです。軽症の患者さんの治療や日常的な健康管理は地域のクリニックにお任せし、症状の重い患者さんは病院が対応するという役割分担を進めるためには、双方の信頼関係が欠かせません。シームレスな紹介・逆紹介を実現するためにも、密にコミュニケーションを取っていきたいと考えています。



ドクターからのメッセージ

地域の先生方と密に連携し、救急を含め迅速な検査・治療に努めています。ご紹介時には、バイタルサイン（酸素飽和度等）や発熱の有無などの情報をご教示いただけますと幸いです。また、退院時にはきめ細かく丁寧なレポートを心がけています。

ドクターからのメッセージ

当科では、常に診療の質向上に努めると共に、開業医の先生方との連携強化にも力を注いでおります。診断がつきにくい症例や、症状の重い患者さんがおられましたら、ご紹介くださいますようお願いいたします。

Close UP!

やくばと病診連携

当院では、インターネットによる予約受付を推奨しております。
紹介予約業務のさらなる効率化を図るため、Web紹介予約ツール『やくばと病診連携』(メドピア社)を導入いたしました。これにより、「やくばと病診連携」(無料)にお申し込みいただいている地域医療機関の先生方は、インターネット経由で直接初診予約を取得できるようになりました。

「やくばと病診連携」による紹介予約の仕組み

「やくばと病診連携」でのWeb予約日時は、紹介元医療機関と患者さん、病院での「バトンリレー」方式で決まります。

24時間
365日
申込可能



☎ 電話 📠 FAX + 📱 WEB

を使った紹介予約の場合

- Webだから24時間予約可能
- FAXの返信待ちもなし
- 患者さんの待ち時間短縮

診療導線がスムーズに

お申し込みはこちら



やくばとで
WEB 紹介予約

やくばと病診連携 Q&A

- Q** このツールを使うのに費用はかかる？
- A** 本ページで紹介している病診連携機能は、無料でお使いいただけます。
クリニック向けの費用が発生することはありません。
- Q** 高齢患者でスマートフォン(SMS)が使えない場合、どうすれば良い？
- A** 高齢者ご自身の携帯番号ではなく、ご家族の電話番号をご指定いただくことで、ご家族が代わりに予約手続きを行うことができます。

お知らせ



臨床研究
センター

臨床研究センターからのお知らせ

エイズ先端医療研究部

エイズ先端医療研究部では下記のような研究を行っております。

エイズ先端医療研究部の取り組む研究内容

大阪医療センターでは、1979年に前身である国立大阪病院に臨床研究部が設置され、「免疫感染研究室」がエイズ研究を担当しておりました。2008年に臨床研究センターへと改組された時に、エイズ先端医療研究部に「エイズ先端医療開発室」と「HIV感染制御研究室」が設置され、HIV/AIDSに関する先端的かつ実践的な研究を進めています。

エイズ先端医療開発室

当研究室では、HIV診療に関する様々な課題に対して、臨床に根ざした研究を行っています。新規抗HIV薬の開発が進み、多くの患者さんでウイルスの抑制が可能となり、長期的な有効性と安全性も確認されています。しかし、早期に抗HIV療法を開始することが難しい状況や、治療を行っても十分に免疫が再構築されないケースも見られます。中にはウイルス量が抑制されていても免疫の回復が不十分な症例もあり、こうした点を研究成果として明らかにしてきました。また、副作用への対応も重要です。とくに神経精神系の有害事象は、患者さんのQOLに大きく影響するため、要因探索に必要な薬剤の血中濃度や遺伝子多型の測定方法の開発を行なっています。そのほかにも、薬剤耐性、薬物動態、急性HIV感染症、ヒトヘルペスウイルス8型感染症、水痘・带状疱疹ウイルス感染症、A型急性肝炎、悪性リンパ腫、市中感染型MRSA感染症、HIV感染が脳構造に及ぼす影響など、多岐にわたる感染症および合併症についても研究を行っています。

HIV感染制御研究室

当研究室では、長期にわたりウイルス抑制と忍容性を維持することを目標に、抗HIV療法の個別最適化に向けた研究を行っています。抗HIV薬は迅速承認の対象となることが多く、日本人における臨床データが限られています。そのため、エイズ先端医療開発室で開発された測定法を用いて、実臨床患者の薬物動態および代謝酵素や薬物輸送タンパクの遺伝的多型の測定を行い、薬物治療の有効性や副作用との関連について収集・解析を行っています。現在は特に東洋人に特異的な遺伝的変異に着目し、より安全で効果的な個別化治療の確立を目指しています。

HIV/AIDS
先端医療開発センター

